

地銀の利鞘と市場構造
リレーションシップ・バンキングの機能強化政策下において

1. 研究の問題意識

- 分析の時期の背景
 - ・ 99 年度に 5 行の第二地銀が破綻し、破綻処理法制の整備が進められた。
 - ・ 地銀・第二地銀も不良債権処理による信用コストが増大していた。
 - ・ 金融再生プログラム (2002 年 10 月発表) には二重性があり、大手行に対しては不良債権処理の数値目標が課される一方、地域金融機関に対しては、リレーションシップ・バンキングの機能強化が掲げられた。
- 問題意識
 - ・ 上記の状況における地銀・第二地銀の利鞘格差の決定要因は何か？

2. 地銀・第二地銀の利鞘の推移

- 預貸利鞘の推移
 - 90 年代半ばから、実現信用コストが急増しており、不良債権処理のコストが利鞘を浸食している。

3. 地銀・第二地銀の利鞘についてのパネル・データ分析

- 二種類のモデル
 - ・ モデル I (被説明変数 = 預貸利鞘 L DM)
 - ・ モデル II (被説明変数 = 実現信用コスト控除後預貸利鞘 NetLDM)
- 定式化
 - ・ 1999-2003 年度の地銀・第二地銀のべ 121 行をパネル分析の対象とする。
 - ・ モデルの基本として Dealership Model を用いて信用リスク (分散)、流動性リスク (分散)、両者の共分散を説明変数とする。
 - ・ これに銀行の財務データ、地元都道府県の経済状況、地銀再編に関するダミー変数を説明変数として加える。
- 推計結果
 - ・ モデル I の信用リスクの係数は 0.004 (1% 水準で有意) と推計され、地銀・第二地銀は信用リスクを預貸利鞘に織り込んでいることが分かる。
 - ・ Hausman 検定では Fixed Effect Model が支持されている。

4. Fixed Effect の比較

- モデル I (被説明変数=預貸利鞘 LDM)
 - ・ 九州・四国地方の地銀・第二地銀が上位を占め、Fixed Effect の総資産加重平均値を都道府県別に比較しても、それらの地域の都道府県が上位になる。
 - ・ 第二地銀が完全に地銀に対して上位
 - ・ 地銀の Fixed Effect の平均値…-0.16、第二地銀の Fixed Effect の平均値…0.19
- モデル II (被説明変数=実現信用コスト控除後預貸利鞘 NetLDM)
 - ・ 東京・大阪など大都市を本店所在地とする地銀・第二地銀が上位を占め、Fixed Effect の総資産加重平均値を都道府県別に比較しても、それらの大都市のある都道府県が上位になる。
 - ・ 一部の地銀は第二地銀を上回っている。
 - ・ 地銀の Fixed Effect の平均値…-0.21、第二地銀の Fixed Effect の平均値…0.29

5. 分析の手がかり

- 貸出金利の決定要因
 - ・ リレーションシップの期間とする実証研究が一般的
 - ・ Berger, Rosen and Udell(2001)に従い、市場構造との相関を考える。
- わが国地銀・第二地銀の貸出の特色
 - ・ 加納(2004)のマイクロ・データの分析では、業態別のメインバンク継続率で地銀・第二地銀が最も高くなっている。
 - ・ Kano and Tsutsui(2004)によると、都道府県による市場分断性が地銀・第二地銀では曖昧であり、都道府県内にとどまらない広域な市場競争がある。
 - ・ 地銀・第二地銀の都道府県別預貸率をみると、東京など大都市の地元預貸率が高く、地方で集められた預金は、東京や大阪の大都市で貸し出されていることが分かる。大都市圏では他業態との貸出競争が活発であることが分かる。

6. Fixed Effect と市場構造との相関

- 市場構造を示す変数
 - ・ 地元支店数、地元貸出金シェア、地元預金シェア
 - ・ それぞれ都銀・地銀第二地銀・信金の三業態で区分
- Fixed Effect との相関(スピアマンの順位相関係数)
 - ・ モデル I では、貸出金残高シェア、預金残高シェアで、都銀が優位な都道府県を地元とする地銀・第二地銀の貸出金利が低くなり、地銀・第二地銀が優位な都道府県を地元とする地銀・第二地銀の貸出金利が高くなつた。これは Berger, Rosen and Udell(2001)の実証結果と整合的である。
 - ・ モデル II では、貸出金残高シェア、預金残高シェアで、都銀が優位な都道府県を地元とする地銀・第二地銀の貸出金利が高くなり、地銀・第二地銀が優位な都道府県を地元とする地銀・第二地銀の貸出金利が低くなつた。これは Berger, Rosen

and Udell(2001)の実証結果と逆である。

7. Fixed Effect と地元での活動

- 地元の活動を示す変数
 - ・ 地元預貸率 = 地元貸出金残高 ÷ 地元預金残高
 - ・ 地元貸出金残高比率 = 地元貸出金残高 ÷ 銀行の総貸出金残高
 - ・ 地元貸出金シェア = 地元貸出金残高 ÷ 地元での金融機関の貸出金総残高
 - ・ 地元預金残高比率 = 地元預金残高 ÷ 銀行の総預金残高
 - ・ 地元預金シェア = 地元預金残高 ÷ 地元での金融機関の預金総残高
- Fixed Effect との相関(スピアマンの順位相関係数)
 - ・ モデルⅠでは、地元貸出金残高比率、地元貸出金シェア、地元預金残高比率では有意な相関がみられなかったが、地元預貸率でやや強い正、地元預金シェアでやや強い負の相関がみられた。
 - ・ モデルⅡでは、地元預貸率でやや強い正、地元貸出金残高比率でやや強い正、地元預金残高比率でやや弱い正、地元貸出金ならびに預金シェアでかなり強い負の相関がみられた。
 - ・ モデルⅡでは地元預貸率や地元貸出金ならびに預金残高比率が高くなる、すなわち地元での貸出に特化する傾向が強まると、NetLDM が高くなる傾向にあることが確認された。
 - ・ また、地元貸出金ならびに預金シェアが低くなる、すなわち、他業態との競争が激しい大都市のある都道府県では、NetLDM が高くなる傾向にあることが確認された。

8. 結論

- 預貸利鞘(LDM)は市場構造の影響を受ける
- 地元の貸出金シェアが低く、他業態を含めた競合が激しくとも、地元の預貸率が高い地銀・第二地銀は、実現信用コスト控除後預貸利鞘(NetLDM)は高くなる傾向にある。
- 上位の業態である都銀が優位な地元の市場においては、貸出金利が低下することで、預貸利鞘(LDM)は低下する傾向にある。しかし、大都市のある都道府県では競合が激しくなっても、地元で経営資源を特化している地銀・第二地銀の実現信用コスト控除後預貸利鞘(NetLDM)は高くなる。これは地元に経営資源を集中させている地銀・第二地銀が、信用コストを的確に予測し利鞘に反映させているからであると考えられる。
- 地銀・第二地銀がリレーションシップ・バンкиングの機能強化を進め、地元での稠密化に成功すると、信用コストのより効率的に利鞘への反映できるようになる可能性がある。

以上